

2017.01.14 おじさんの勲章

P81 下から 6 行目～P82 16 行目

P 町は、私の記憶の中にある小奇麗な町とは全く違っていた。昔ながらの瓦屋は、地中に半ば沈み込んだように廃れており、毎朝藁ボウキの掃いた跡で整然としていた路地裏は、ブロックがデコボコと置かれ、薄汚れていた。家々が競って醜悪に敷地を軒先まで伸ばそうとし、そうでなくても狭い路地を、さらに狭くしていた。そのむさ苦しい路地裏をたどり、旅人宿のある三叉路まで向かう間、私はその町にすむ人々さえも、みすぼらしいだろうと見下していた。

旅人宿がある三叉路から左へ曲って三軒目の家もやはり、柱が傾きかけ、玄関の敷居が道よりも低く、沈みかけた廃船のような、古い家屋だった。表札も番地もなかった。私は向かいの家の門まで後ずさり、その家のぼっかりと消えた屋根の龍のあとと、瓦屋根の溝との間に生えた草を眺めてから、玄関の隙間から中の動性をうかがい見た。朽ちかけた家屋だが、敷地は広く、ちぐはぐな色のゴミ箱からどれも中身があふれ出ているところをみると、何世帯かが暮らしているようだった。

私は大きな咳払いをしながら玄関の扉を押した。玄関脇、練炭の焚口の前にしゃがみ込み、釜の中の洗濯物を棒でかき回していた女が、ちらっとこちらをにらみ見た。開いたままの中門から、かなりの広さの中庭と、何世帯かの間借り部屋が見えたが、玄関脇の部屋にノウネおじさんが横たわっていると、私は確かに感じとった。ソンプィョ兄貴が言っていた便の話のすぐさま連想できるだけの悪臭が、漂っていたからだ。

P91～

やがておじさんの手に力がこもり、口の動きがはっきりとしてきた。私は彼のぼうっとした瞳の奥に、ほのかに喜びが浮かぶのをしっかり見た。そして彼の口が放つ言葉を、はっきりと聞いた。

「ウンピョ、ああ、ウンピョや...」

おじさんは、そう言っていた。私はおじさんが実の息子を振り切り、甥を連れて避難した後、一度たりとも彼の口から息子の名が出てくるのを、聞いたことがなかった。ウンピョの友である私を見れば、ウンピョもこの空の下死なずに生きていてくれと悲願する眼差しでも浮かべるものだろうに、一度もそんなことはなかった。彼は息子を振り切ったその瞬

間、息子の名前さえ忘れてしまったところか、はなから記憶から消して生きているかのようだった。

「“息子”の代わりに長兄の長男を連れて避難した」

そう自慢する時の“息子”も、普通名詞としての“息子”であり、ウンピョという固有名詞の“息子”ではなかった。

彼が初めて口にしたウンピョという声は、私だけがようやく聞き取れるほどのかすかなものだった。だが私には、胸を引き裂かれるような悲痛な叫び声に聞こえた。彼は死力を尽くして、悲痛な叫び声をあげていた。ああ、三十年ほど前に、ウンピョの母の、胸を引き裂かれるような悲痛な叫び声が、今となってようやくその恨みを晴らしたのだ。

こうなるのを長い間待ち望んできたはずなのに、快感より、こみあげる虚しさに、私は打ち震えた。

ふたたびキーホルダー売りたちが並ぶ路地に出た時は、日がだんだんと沈んでいた。日が沈む頃になると胸にたくさん錠前をぶらさげて、米袋と塩サバを手に、ゆっさゆっさと歩いてきたノウネおじさんの姿が脳裏に浮かんだ。米袋と塩サバのせいなのか、錠前が勲章に見えるような、とんでもない錯覚は起こらなかった。彼はうら寂しくみすばらしい錠前売りに過ぎなかった。

私が彼を直視できるようになるまで、なんと三十二年もかかったのだ。

(試訳：池口 小織)